

# 歴史より観たる自殺特に情死

三上参次

私が今日此演題を掲げましたに就いては、豫め御断りをして置かなければならぬことがあります。去る三十八年（明治三十八年）の事でありました。大学の有志者が時局講談会と云うものを開かれた時に、私は「歴史上から観たる旅順の開城」と題して一場の講談をしたことがあります。其時の趣意は、ステッセル將軍が旅順を開城したので、日本の為には非常に結構なことであつた。上下之を名譽の開城と云つて、我も悦び、人も喜び、ステッセルを偉い人だと賞め立てた。されば兒童などの間には、名譽の開城と云う言葉が外交の辞令に過ぎないと云うことには心付かずして、開城即ち降参と云うことにも名譽の降参があるかの如くに誤解して、頗る寒心すべき傾向がある様に感じましたから、私は若しあの場合に、日本人がステッセルの地位に立つて居つたならば、どうするであろうか、日本歴史の上にもああ云う場合は古来幾十となく見えて居るので、其一々の場合を調べましたところが、或極めて少数の場合の外は、ステッセルの如き挙動に出て居るものは無い。大多数は城を枕に討死するか、若くは主将一人其命を捨て他の城中の者の無益に死するを救うと云う挙動に出て居る。それ故にこれは注意せねばならぬ、ステッセルの挙動が名譽であると云う様に将来の国民に誤解せしむる様なことがあつてはならぬと

云う趣意であつたのです。其頃から以来人の自殺をすることについて注意したのでありますが、此自殺に就いて私は特に二つの興味ある事柄を注意した。其一つは殉死と云うこと、一つは此処に書いた所の情死と云うことであります。殉死の事は何れまた機会を見て御話をしようと思ふのでありますが、それは武士道の上から観、又或る時代の社会の構成の上から観て、大分研究して見るべき価値のある問題と思ひます。即ち簡約に云いますれば、武士たるものが戦場に出ずれば君の御馬前に於て討死をすべきは申すまでもない。されば、若し戦争に出ない場合に主君が暈の上で死なれたならば、自分は追腹を切つて矢張りあの世までも御供をして忠義を盡そうと云う念が起つて来るのは当然のことであろうと思ふ。忠臣は二君に仕えずと云う格言を極端に狭義に解釈をすれば、そうなつて来るであります。さてかかる追腹は義理の上から言へば罰すべきことではない、誠に忠義の厚い真心から出たことでありますから、寧ろ嘉すべきことであります。併しながら其君に取立てられた程の技倆のある者が、主君と共に続々と死んでしまつて、あの世へ御供をすると云うことになつては、後に残つて居るところの嗣君の為に心細いことである。其家の富強繁栄を図る上に於て甚だ損なことである。しかのみならず、此殉死をするに就てもおいおいと種々な弊害が出来て来ましたから、幕府も寛文(一六六一)年間に至つて之を厳禁しましたが、諸侯の中には、幕府よりも早く禁じた人がありました。情に於て、又武士道を奨励する側から観ては禁じたくないでしょうけれども、その弊に勝えないので厳禁しましたのです。又其禁令を励行する為に犠牲に供せられた気の毒な大名も家来もあつたほどで、この殉死と云うことは遂に我邦で跡を絶つて仕舞いました。自殺の此種類に就ては種々気の付いたこともありま

すが、今日はそれは一切省きまして、主として情死に就いて言おうと思ひます。

近頃新聞などでは情死が非常に多く見えて居る。併し新聞にそう云う記事が多いと云うので、必ずしも其点に就いてのみ私は今日の講演をするのではない。唯歴史の上から、学問上の研究として此題に就いて講ずるのである。又これを講ずるに就ては、情死の弊害の続々と世の中に發生するのは不健全なる文学上の作物の致す所が多い、文士の責を負うべき分量が少くないと云う論をも、是から申しましようけれども、それも今日の文学界の状況を問題として諷刺的に言うのではありませぬ。何処までも学問研究の上の御話ですから、其所の区別は豫め御承知を願ひたいと思ひます。

私の元来の考では、自殺と云うことは大多数の場合に於ては悪い、併し西洋の思想とは違ひ、或場合に於ては善いということゝを認めて居る者であります。それですから一昨年（一九〇七）、彼の石田三成の辯護論をした時にも、三成は快男兒で面白く思う点が多いけれども、唯其最後に至つて、いつまでも露命に恋々として恥を曝したのは、末尾が掉ねぬ様な心持がして惜むべきであると言つたのであります。其時に友人のうちには、そうではない、首と胴と二つに分れるまでは命を惜んで、少しでも間隙があつたならば逃げて、そうして手腕を伸べよう、捲土重来を謀らうと云うりょうけんでなくてはいかぬ、日本人には就中かかるといふ説があつた。成るほどそれも尤な説である。三成はさうであります、かの平宗盛の最期は如何。これはどうもさう解釈は出来ぬ様である。『源平盛衰記』などを御読みになると、さう御感じになるであります。殊に『吾妻鏡』などを見れば、殆ど嘔吐を催さんばかりの最期である。是より先き、平重衡が嫌倉に來ました時には、頼朝（源頼朝）は之を歓待

をして、彼の千手の前と云う婦人をも侍らしめて饗応を致して居る。又其歸洛(京都に)の時にも十分鄭重にして居る。之に反して、平宗盛は前の内大臣であり、平家の總頭領でありながら、捕虜となつて義経(源義経)に護送せられて鎌倉に來ました時には、頼朝は対面を致さぬ。最後に宗盛が頼朝に面會して京都に帰りたいと言いました時に、大江廣元は、彼は前には内大臣であつたけれども、今は官位を廃せられた無位の囚人である、頼朝公が之に會わるるのは軽々しい訳であると云うので、頼朝はただ簾中より宗盛を覽ただけである。さて比企能員をして旨を伝えしめて、頼朝は宗盛並に平家に対して、何等深い怨みはござらぬけれども、勅命(天皇の)に依つて追討に及んだのである、是の如き境遇になつて辺鄙なる鎌倉まで御下りになつたと云うことは如何にも同情に堪えぬ、しかし我が弓馬(武)の面目であると云う様な挨拶をさせた。所が宗盛は能員に向つて頻に鄭寧に挨拶をして、どうか命を助けて貰つて仏門に歸依したいと云う希望を述べた、其様子が如何にも卑劣であつた。そこで『吾妻鏡』の文章を書いた者の批評の言に、比企能員如き鎌倉の家臣に向つて、清盛(平清盛)の子息宗盛ともあるう人が、かかる諂諛(おもねり)なことをしないで宜い、切りに命乞をせられて居るが、寧ろ死を賜わつた方が優遇であろう、觀る者爪弾きをした云々と書いてある。そうして遂に京都に送り還さるる途中、近江の篠原に於て首を刎ねられるのであります。到底死を免れがたい事は前後左右の状況に依つて明々白々である。かかる場合に臨んでも、尚お一日の生命を惜んで、是の如く醜を千載(千年)に遺すことは、氣概ある我日本人の先祖の中では異常なる人である、通常の意義でないところの非凡の人である。併し幸にして後の日本人は、あんな事は恥であると云うので、悪例として挙げて居ります。

人をして奮慨激越せしむる材料として日本歴史の中にかかる人のあつたのも結局宜いかも知れませぬ。是を以て観ますと、自殺は概して宜しくない。しかし昔は志士仁人身を殺して以て仁をなすと言つて居ますが、自殺して後世に良い影響を及ぼすべき場合に於ては嘉すべきである。少くとも宥恕すべきである。之と反対に悪結果を遺すような場合は常に之を制すべきである。古今の歴史上の実例に就て見ますと、日本の歴史でも支那の歴史でもそう思われます。西洋になりますと自殺と云うことが少い。稀れに有つても場合が違い、意味が違うことが多いようであります。

そこで私の此処で言うところの情死と云うものに就ても、或は文学の上から観察し、若くは人情の方から観察しますと、或は恕すべき点の絶えて無いではありますまい。けれども、概して言えば、私共の賛成しない自殺の側に属するものである。それは是から段々申しましようが、そもそも情死と云うことの現われて居るのは、小説であるとか、浄瑠璃本であるとか、俗謡であるとか、芝居であるとか云う様なものでありますから、自然私の言葉も卑猥に互る様なことが無いとも限りませぬ。此講壇に於てそう云う言葉を用うるのは不謹慎の様でありますが、此演題それ自身は斯う云う場所に於て論ずるのも士君子（德行高く学問に通じた人）の恥ずべき問題でないと思ひますから、是から申上げようと思ひるのであります。

扱日本には情死が非常に多い。現在の世の中にも、新聞で御承知の通り或る時は一日に二つも三つも続いて謂わゆる三面と云う場所に其話が出る。中には無理心中と云う様なものもある。又東京の新聞と大阪の新聞とを比べて御覧になりますと、上方は昔からの引続きである故でもあるか、関東より

も情死が多い。又之を支那とか西洋とかに比べて見ますれば、日本の様な多い国は決して無いと云うことは間違ひはありませぬ。西洋の小説や脚本を御覧になつても、英国にはシェークスピアの「ロミオとジュリエット」の如き取除けの場合、情死に似た様なことがあります、独逸にもあります、しかし決して日本とは比較にならない。支那の小説にも、その中には情死に似寄つたことを骨子として居るのも絶えて無いではない。そうですけれども、それとても決して決して日本の様に多くはない。逆も比較になるものではない。同じ死ぬとしても日本とは意味が違つて居る。さて情死と云うものの定義を下せば……定義などというのは大業でありますけれども、……まず男女相愛して共に生命を断つと云うことですが、これが日本に限つて多いというのは、どういふ理由でしょうか。わが日本人は祖先の時代からして特に男女間の情愛が濃厚なのであるかと云う疑問が起る。併しそれはそうは思われぬ。と云う訳は、わが日本歴史の長い間に於て、情死と云うことは古代に於ては見えて居らぬ。どんな国でも、どんな時代でも、男女の一方が死ねば、一方がその後を追うとか、又は何かの事情に迫られて、偶然若くは故意に、共に若しくはやや時日を別にして死ぬと云うことは無いではありません。『万葉集』にも情死らしく解釈せらるる歌もある。又疑わしい書物となつては居るが、『吉野拾遺』の中にも情死に近い一の例として引用しても宜しかろうと思はるる話も載つて居る。しかしながらあれほど淫靡で誨淫冶容（みだらでなまめかしい）の書、土君子の読むべからざるものとして、或る部分から斥けられた所の平安朝時代の物語類の多い中にも情死が骨子となつて居るところの物語があるかと云うに、私は未だ見たことはないのである。『源氏物語』の中にある浮舟が宇治川に身を投げたことなどは、情死の片

割れと強いて解釈すれば出来ぬことはありますまいけれども、決して情死ではない。其他『落窪物語』『狭衣物語』なども随分際どい所まで書いて居るが、情死の事は少しもない。それから下つて鎌倉時代にも無く、又足利時代の文学の精髓であるところの謡曲を見ても、謡曲は幾百番もありますから、私の氣の付かぬのもあるかは知れませぬが、まず多くの人が読み又謡うところのものには情死を骨子としたのは無い様に思う。縦いあつたにしても、極めて稀有のことであろうと思う。勿論良人が何かの事情で死んだときに妻が之れを悲み、遂に亡夫の後を追うて死んだという類の貞烈の事蹟は、王代（王朝）の昔から少くは無い。『大日本史』の「烈女伝」や野史（私撰の歴史）の「貞烈伝」に載つて居るうちにも幾人かはあります。しかしこれは嚴密に云うところの情死では無いのです。されば男女間の相愛の情が情死せざるを得ぬほど特に先祖の代から日本人間には濃厚であるということ、是が日本人の先天的の特性であるという説明は出来ないことと思う。然るに江戸時代に至ると急に情死が多い、殊に江戸時代の軽文学が開けてからそれが多いと云う結論になつて居る。若し此くの如き安排で進んで行つたならば、軽文学が進むに従つて此害毒が益々横溢（あふれるほど）するのではないかと云う将来の懸念も無いではない。又地理の上から言いますと、恰も時代の上からは昔に無くして江戸時代に多くなつた様に、上方地方に多くして関東地方には少い。是は先刻服部博士の御話の中にありました所の、満人と漢人とに区別がある様に、上方の人は千年来の華奢風矯悪く言えば遊惰淫靡な風に馴れ、弱々しい氣質になつて居るのでありますから、どうしても情死でもしようということになり易い。之に反して関東地方の粗野武朴な方にはそう云う傾向は少い。又京都と江戸とは地勢から見てもそうなるうと思

うのです。試みに京都附近の小高い所に登って見れば、所謂山河襟帯自然に城をなすという風で、景色は佳いが、どちらを見ても眼界が支えて居る。所が東京では九段坂の上に立って見ても、若くは上野愛宕の上に立って見ても、京都の様に窮屈な、束縛されたような感じが少い、そう云う関係だけから考えても上方の人は、男女が情に迫るなどと云う場合にも命のあきらめ方が早いのであろうと思う（笑声起る）。是も先ず原因の一つとして数えることが出来ると思う。

先刻申したところの軽文学が盛になって随って情死が多くなつたと云うことを言うに就ては、ここに一つ注意して見なければならぬ点がある。それは何かと云えば、情死と云う事実があつても、軽文学があつてそれを世間に弘め、後世に伝えるということが無かつたならば、情死は少いと合点せられはしないか。今日情死が多いと云うのは新聞紙が到る処にあつて機敏に之を報道するからである、それでも多く見えるので、昔とても同様に多く有つたのではなからうかという疑いがあります。如何にも幾分かそう云うこともあろうと思う。面白い情死の仕方をして、文士なるものが之を筆に上ぼせなかつたが為に、全く世にも後にも噂されぬと云う場合も多からうと思う。それを事実上に証拠立てることも出来る。何故かと云えば江戸幕府の司法書類などを見ますと、相応に面白そうな情死の实例があつても、それが一向に芝居にも浄瑠璃にも仕組まれて居ないのもあり、之に反してさまで、なき情死が、軽文学に依つて大変に面白く伝えられたものもある。しかのみならず、軽文学があるが、為に情死でもないものを情死として伝えられたものもある。有名な芝居や、浄瑠璃や、小説に仕組まれて居るところの心中物でも、其事実を………穿鑿すると云うほどのことでもありませんが、遡って調



べて見れば、情死でも何でもなく様ながある。其著しい例を一つ言つて見れば、彼のお半・長右衛門『桂川連理柵』と云う院本(演劇の筋書き)があります、これはかようなことを好んで穿鑿する仲間の方から言いますと、二人が駈落をする所を盜賊の為に財物を奪われ、その上殺されて川の中へ一緒に投込まれたと云うのである。然るにそれが心中物と為つて大に世の中に持囃されて居る。軽文学で美化すると云うのは此類のことをも言うのかは知れませぬが、とにかく一方には有るものも伝えられず、他方には無いものも伝えられる。軽文学が進めば、有るものは勿論、無いものまでも有つたとし、伝えられ、手本を世人に示すと云うことは注意して見るべきことである。

そこで古今時代の相違と東西地理の相違との事は大ザツパにまずこれだけに止めて置いて、さて何故に江戸時代(一六〇三—一八六七)からして今日に至るまでに情死が多いかと云う原因を尋ねて見ねばならぬ。先ず飲食男女、人の大慾存すという点は、世界共通でありますから、申さずに置きましょう。世界共通の事柄が原因になって日本にのみ特別に情死が多いと云う説明は出来まいと思う。日本人の男女相愛するの情が世界の他の国の人々より濃厚であると云うことも認められない様に思う。されば日本に關する特別の原因は何であるか、一々之を考へて見ましよう。

第一に宗教上の來世の考へと云うことを挙げねばなるまいと思ひます。そもそも仏教傳來このかた年久しく、特に平安朝の終り頃より念仏宗と云う様な、誰にでも入り易く、熱し易い所の宗派が新たに日本に起つて、下層の人々にまで弘通するに従つて、塵の此世で死んでも、あの世で、第二の、而も現世よりも優れる生を享けることが出来ると云う様な信念が非常に強くなつた。されば現世の値段を

軽く見て、何か事があれば直ぐに一命を擲つと云う決心を起させる、これが確に一つの原因であろう。併しながら、この觀念は単に情死の場合に於てのみならず、其他の多くの場合に於て生を軽んずるの原因となつて居る。即ち主君に対しては忠義となり、国に対しては愛国の念となつて、いざ戦う場合には身を挺して敵に当り、その矢面に立つて命を捨てると云う覚悟は大に茲にあるのであらうと思ふのです。それですから未来の考は善良なる場合にも随分多いのでありまして、単に情死という詰らぬ事だけの原因ではない。加之これが情死の一つの原因とした所で、二の未来の觀念なるものは平安朝時代にもあつた、鎌倉時代にも、室町時代にもあつた、時代によっては外国にもある、決して江戸時代の延宝(一六六七〜一六八七)元禄(一七〇四〜一七〇八)以後に特に盛になつたものとは言われない。されば延宝元禄以後に特に情死の多いということに就ては、尚他に原因をさがして見なくてはならぬ。

第二に斯うであると思はるる原因は即ち武士氣象と云うものである。武士道と申しても宜しい。ここに云う武士道は社会の上下に互つて居るもので、決して武士の階級のみ存在する氣質ではありませぬ。町人と雖も、百姓と雖も、武家時代には矢張り多少武士氣象を有つて居る。この氣象は上古の世にもありますが、源平興起の時代から特に注意せられ、鎌倉時代(一一八五〜一三三三)に至つて大に發展し、遂に南北朝(一二三六〜一二三九)の戦争、室町時代(一三五七〜一五七三)の長い間の戦乱を経て、江戸時代に至つて學問の方面と一緒になり、又それより以前に仏教の方面、特に禪宗の方面とも一緒になりまして、其結果として宗教上の信念以外にも、死を軽んずると云う精神が餘程上下に盛んであつたのです。即ち武士道の側から觀ても死を軽んずると云う精神がある。そうして当初に申した殉死と云うわが歴史上の

珍しい現象も、之に依つて説明が出来ようと思う。とにかく武士気象が第二の原因であると見ることが出来ようと思ひます。

それから第三の原因と見るべきは特に婦人に限る所の武士道、言いかえて見れば貞節問題である。武家政治となる以前の時代に於て、我國の歴史、若くは物語の上に婦人の貞節と云うことがどれ程あらわれて居るか云うことは、一つの研究すべき問題であつて、如何にも貞節は我國の婦人に早くより見わたる美点である。見るべき事蹟が多い。しかし武家時代となつて、貞節問題は最も注意せられ、鎌倉幕府で『貞永式目』を制し、竝に其追加の法令を出すに及んでは、明かに其法令の中に婦人の貞節を奨励して居ります。此精神は段々と儒教の教うる所と合一してますます貞節を婦人に要求するようになつた。就中江戸幕府時代に至りまして、儒学就中程朱(中国宗の儒学者程頤・朱熹のこと)の学が盛になつてから、貞節問題は、いよいよやかましくなつたことと思ふ。忠臣は二君に仕えず、貞女は両夫に見えずと云う言葉は動かすべからざる格言となつて居るのであります。されば男女間の關係が切迫し、どうしても他に解決が出来難いと云う場合に至つては、この貞女、両夫に見えずと云う格言、即ち貞節問題は、情死を促すに就いて、屈強なる理由になるであらうと思ふ。少くとも其口実となることと思ふ。即ち茲に相愛して居る男女がある、それを其親なり、若くは他の者が其意に逆うて圧迫を加え、他の男子なり女子なりに配せんとすれば、他の事情を顧みず、単に貞女両夫に見えずと云う一本槍で情死と決しても、自分では決して悪くないと信するらしい。それが必ずしも教育のある女、即ち『女大学』や『小学』を読んだと云う教育のある人では無いけれども、小説を読んでも、浄瑠璃を聴いても、芝居を見

ても、かかる趣意で仕組まれて居るのが多いのでありますから、日本の婦人は実に眼に一丁字の無いものでも此貞節問題の如何なるものかと云うことは知つて居る。是が第三の原因として数えることが出来ようと思ひます。

それから第四には時勢の進歩と云うことがまた一の原因となつて居るだろうと思ふ。同じ江戸時代でも、慶長（一五九六〜）、元和（一六一五〜）、寛永（一六四四〜）、慶安（一六四八〜）と云う様な初期の時代に於ては、未だ情死と云うことは人の耳目に触れるほど現われて居ない。それが延宝の終りから元禄、宝永（一七〇四〜）に至つて、急に著るしく多くなつて居るよう感ぜられる。それには又種々特殊の原因のあることでもありますけれども、一つは社会の進歩がそうならしめた訳であらうと思ひます。それは何故かと云いますと、未だ殺伐兇暴なる氣風の去らない時代には、例えば単に江戸の町だけで言ひましても、男女の卑猥なる關係を誘致する様な諸種の設備が出来て居ない。上方には割合に早くそれが出来て居ましたけれども、まだ江戸時代の最初には江戸には少い。即ち料理屋であるとか、湯女屋（遊女を置いた湯屋）であるとか、尚も少し劣等な営業者はまだ比較的少い。然るに到る処の大きな神社寺院の境内などに、さようなものがあると云うことになつて来れば、自ら多くの人がそれに接觸して、色に溺れ、金に窮し、随つて中には情死でもしようと思ふ境遇に陥る者の多くなるのは当然のことであり、即ち複雑なる誘惑物が多くなつて来、随うて情死の結果をも生ずるのです。況や延宝から元禄頃となつて来ては、泰平が殆ど百年近くも続き、世の中の各方面が華奢になつて来る。それと同時に幕府は財政の困難を極める。旗下や大名に於ても大抵同様なことである。農家と雖も、町人と雖

も……或る場合に於ては武士と利害の關係を正反對にすることがありますけれども……或場合に於ては又利害痛痒を同じに感じることがある。かかる場合に男女の關係が切迫して来ますれば、今日の言葉で云うところの生活問題と云う点からしても情死と出かけて来る。即ち社会の進歩と共に生計が困難となる、そこで詮方なしに情死すると云うこととなるのです。けれども多くの情死の場合を考えて見ますれば、旧日本では西洋諸国の如く、又今日の日本に於けるが如く、単に生計問題からして起るところの自殺は少く、寧ろ世間に対する義理に搦まれ、人情に迫られて、命を捨てると云うのが多かったのであります。即ち自殺の一部分なる情死と云うことも、単に生計問題からと云うよりは、寧ろ世間に対する義理や、人情やから出たものが著しく多いと云うことは、悲しむべく厭うべき中にも尚お幾分か恕すべきことではなからうかと思われれます。

上に述べて来ました通りに、宗教上の未来の考、武士道の死を軽んずる氣風、特に婦人の武士道なる貞節問題及び時勢の進歩即ち誘惑物の多きこと生計の困難なること等の關係、是等を以て日本に情死の多いのは尤もだと云う説明は出来ようと思ひます。けれどもこの四個の原因は延宝元禄以前の時代にも多少とも何処かにあつたに違ひない。さればこれだけでは尚何故に延宝元禄以後に目立って情死が多いかといふことの説明は出来ない。是に於て最後の原因を文学の進歩の上に求めなければなるまいかと思ひます。先ず江戸時代に於て人口に膾炙して居る所の情死の、最も早く見えて居るのは……最も早くと云うのは或は誤つて居るかも知れませぬが、少くとも最も早きものの一つを云えば、平井権八・小紫の一件などである。東京の近郊なる目黒不動の近くに比翼塚と云うのがありますが、あれなどは

正確には分りませぬけれども、五代將軍の初め頃、延宝の晩年か、天和初年（八一六）の頃のことであろうと思ひます。この話は後に文士の手<sup>よ</sup>に依<sup>よ</sup>つて頗<sup>すば</sup>る美化せられて居<sup>い</sup>るのですが、平井権八と云う盜賊が斬罪（首切り）に処せられた、その初七日に小紫と云う情婦が其墓へ參つて自害した、之を合葬したのが比翼塚だと云ひます。完全なる定義に相当した情死ではありませぬ。従うてかかる『貞烈伝』にでもありそうな死に方は昔から間々ありますが、兎に角この一件などは近代の情死の多くなつた原因の一とも見てよろしい。少しく其後に近松門左衛門の作なる浄瑠璃に、お夏・清十郎の情死のことがある。それは清十郎が首を斬られる刑場の圍いの外で、情婦なるお夏が共に死んだと云うのである。彼れと此れとは唯同じ時に死んだと、幾日か後に死んだと云う相違があるだけのことであるから、まずは等を近世情死の多くなつた源であると云つても宜かろうと思ふ。それから元禄年間となつては實に夥しいのでありまして、それを年代を逐うて一々列挙することは管々しくもあり、大分馬鹿らしくもあるから省きますが、近松の手<sup>よ</sup>に依<sup>よ</sup>つて伝えられて居<sup>い</sup>る二三を挙げますと、元禄八年（九五）に彼の三勝・半七の心中がある。元禄十四年（一七）には小さん・金五郎と云う心中がある。其翌年には例の近松の名高い曾根崎心中と云う、世話浄瑠璃で大喝采を博したものがありますし、宝永（一七〇四）には例の今宮心中、梅田心中がある。……是等は年代は少々間違つて居るかも知れませぬが、この講演にはさようなことを詳細に考証する必要はない、要するに是等を初めとして實に沢山あるのであります。さてそれがどう云う風に世の中へ、文学の手を借りて伝えられるかと云へば、先ずザツト小唄に作られ、祭文に謡われ、浄瑠璃に綴られ、芝居に仕組まれると云う様な次第であります。それは必ずしもそう

云う順序ばかりではありませぬ。或は脚本と浄瑠璃とが同時であつたり、若くは相前後したり、或は祭文にも作られず、小唄にも謡われずして、近松などが出来事があつて間もなく直ぐに浄瑠璃に作る云う様なこともあります。

これから文士が此情死なるものを如何に鼓吹して居るか云うことを少し言つて見ようと思つてあります。文士は近松門左衛門でも、紀海音でも、近松半二でも、又其外のものでも、必ずしも情死を奨励する云う不都合な意味で書いて居るものではありません。馬琴が勘善懲悪と云う主意を有つて居つた如く、まさか情死奨励、心中鼓吹と云う間違つた見識を有つて居つた訳ではありません。併しながら其書いて居る所を人が読めば、自然に感化せられる。いつでも問題になることではありませんが、今日の多くの新聞紙の三面記事は餘り露骨に書き過ぎる、あれは書かぬ方が世の中の益であらうと人々は云う。所が新聞社の方からは、實際の事実を社会に報道するのである、直写して、すなわち人々が之に依つて懲肅せられる、反省するのである、と云う理窟が言えましよう。それと同じ様なわけで、之を以て近松其他の作者を責めるのは少し酷かも知れませぬが、其作物の世に行われたる結果から見れば、どうしても非難せられても仕方があるまいと思つ。是に於て私は一つ懺悔すべきことがあります。餘程以前のことではありますが、私が大学を出ましたとき、一友人と日本文学史と云うものを書いたことがあります。其中に近松を非常に賞讃した。それは私が主に近松の時代物浄瑠璃を読んで悦んで居つた時分のこと、殊に国性爺合戦の浄瑠璃などを非常に悦んで、近松の文才を以てかかる材料でやつて居るのは実に偉い大文豪である、日本のシエークスピアであると云うようなことを書きましたが、そ

れは今更慙愧に堪えないことである。彼れが大文豪であること、云うことはいつも変らぬけれども、文学道徳、社会道徳等の上から言つて見れば、私の二十年前の近松観と今日の近松観とは大變に違つて居る。彼れの世話物浄瑠璃を読んで見ると、近松に大に小言を云わなければならぬことと思う。何故かと云えば、私が今日事新しく言うまでもありません。疾く江戸時代に於ても少しく世道人心に注意する学者の論文随筆などを見れば、大抵それを言つて居る。中井竹山の『草茅危言』には院本などの新しく出るのを禁止せられねばならぬ。在来のもので雖も、心中などの書いてあるものは總べて削除しなければならぬと論じて居る。太宰春臺の『独語』を読んでも、矢張りそう云う意味で、餘程激烈な言葉を以て浄瑠璃を論難して居る。三味線や浄瑠璃などは非人のするものであつて、決してお座敷に上げてはならぬと言つて居る。井上金峨(江戸中期の儒学者)の『病間長語』には、大阪に心中の多いと云うは、一つの心中があれば、一夜の中に其を書上げて、浄瑠璃なり芝居なりに仕組む輩があるからだと言つて居る。近松の『今宮心中』や、『曾根崎心中』を書いた例もありますから、井上金峨(いのかみ)のかかる小言を受けても辞することは出来ないだろうと思ひます。私は文芸の作物の社会に及ぼせる影響の上から、大体に於て是等の学者の説に同意を表するのであります。

そもそも情死の第一原因たる未来の考、この世で添われなくてもあの世へ行つたらば蓮の上で添われると云う考。若しこれが本当ならば、至極有難いことであろうと思う。あの世へ行つたら必ず添われると云うことが確実ならば、情死しても宜いかも知れぬ。この未来の考は唯僧侶の説教や経文で説くばかりではなく、実は浄瑠璃に語られ、芝居に演ぜられてこそ、愈々一般の人に確實になつた様に



思。最も屢々語られ、又最も屢々舞台に於て演ぜられるところの心中物、……近頃はやや制限せられて居ると云うことですが……例えば三勝・半七、お初・徳兵衛、お染・久松、それからお初・久兵衛、其外の心中物を見ましても、それ等の各々の作に於て、一箇所若くは数箇所に未来の希望を述べて居らぬものは無い。即ち『曾根崎心中』、之は文学として情死を世の中に紹介した最も有力なるものであります。其中にお初をして「この世ばかりの約束か」と云う様なことを言わせ、又三勝・半七の中には三勝の言葉で「永い未来の契りこそ、願ふところの住家なり、早う殺して早う殺してと死を悦ぶぞあはれなる」といわせ、お染・久松の中には「未来は、一緒と手に手を取つて」と云わせ、お初・久兵衛の中には、親に先だつ不孝はどうかゆるして下されといい、さて「のふわが夫よ待ちたまへ、未来は、一つ蓮ぞと」と云う様に、一蓮托生と云う念が到る処に鼓吹されて居る、かかる例は実に沢山にある。善智識の説教よりも、斯う云う、浄瑠璃や演劇の文句の方が、心中、でもしよう、と云う人間に向つては強烈なる感動を与へたに違ひない。

次に文士が情死を美化したと云うことにはどう云う実例があるかと云うに、是は別に申すには及ぼぬようですが、近松などの作物の中から最も著しい二二の例を言つて見れば、元禄十五年（一七〇二）の『曾根崎心中』であります。其文章は昔の人も多く賞美して居るので、蜀山人も之を激賞し、物徂徠（荻生）も近松の長所は茲にあると云つて賞めて居る。就中「此よの名ごりよもなごり、死に行く身をたどふれば、仇しが原の道の霜、一足づゝに消えて行、夢のゆめこそ哀れなれ」云々の條の如きは、なるほど文章として名文である。但し此近松を文章の上から賞める様な人は心中をしそうな人ではない。け

れども普通の人が之を読めば己れも作中の人となるのである。況んや、これが鳴物に合わせられ、舞台で謡われ、若くは演ぜられるとなれば、其一種の美が文字の分らぬ人々にも解し得るのであります。それですから『曾根崎心中』などは其道の人の説く所に依りますと、幾度も形を変え、様を変えて、世の中に出て居ると云うことです。かくの如く単に文章の上に於て美化するのみならず、仕組の上に於ても美化することが多いのであります。先刻申したお半・長右衛門などは即ちそれで、これは兩人密通して出奔する途中に盗賊に殺され、河へ投げ込まれたのが実事だと、詮索好きの好事家は云うそうです。これが情死と仕組まれたのは成るほど或る意味の美化に相違ない。また彼の町家の代表的心中となつて居るところのお染・久松の浄瑠璃、是も兩人の間に實際恋愛が成立つて居たのか、どうか、或説に依れば単に久松と云う小僧がお染と云う女兒の守をして居つたが、過つて水に落して殺して仕舞つた、それで自分も死んだのである、一向恋愛でも何でもないと云うことですが、それを恋愛として彼紀海音が初めて浄瑠璃に作り、その後種々と作りかえられて、後々まで持囃されて居るのである。かく文章の上に美化せられ、又仕組に於ても美化せられた所ものが、幾度も繰返し繰返し形を変え様を変えて現われて居ますが、其形を変え様を変えて現われる時代は、一方から云えば人情風俗の壊れた時代に多いと云うことは、一の注意すべき現象であると思ふ。即ち八代將軍吉宗公、白河樂翁公（松平）、水野越前守と云うような人々が出て、社会を改造しようとする以前の時代には、多く嫌な作物があらわれて居ると云うことは、一の注意すべきことで、即ち事新しく申すまでもないことですが、社会がそう云う作物を歓迎する様になりますから、文士は繰返し繰返しそれを出すと云うことになるので

あります。是は歴史の上から観て実例を申すことが出来るのであります。

文士が文章を飾り、若くはそれを糸竹(器)に合わせて語らしめる場合に、其一字一句でも、非常には変に感ぜしめる場合も無いではない。それで以て文士の一字一句も如何に忽にすべからざるものがあるかと云うことを証し得るのであります。彼の近松の作の中に『心中万年草』と云う、文章の好いのがあります。それは高野山の下の神屋と云う所の町家の娘と高野の寺の小姓との出来事を書いてある。所が高野山は真言宗の本山であるために、この二人は最期に至って真言陀羅尼を唱えて居る。通例勿物で死ぬとか、水に身を投げるとかの場合には、落語家の云いそうな事ですが、南無阿彌陀仏と言えば、餘程調子が宜いのであります。南無妙法蓮華經を唱えるのも多く書いてはありますまい。ところが近松は此二人の死ぬ時に、脇差を抜いて胸に押当て、「おんあばきや、べいろしやの、まかもだら、まにはんどま、じんばらははらはりたや、呷と突つ込む切尖の」云々と書いてある。之を讀んでは涙を零すべき所がどうも変になる。真言宗の信者はそうでないかも知れぬが、私共にはおかしい。これでは一向心中を真似て見ようと云う気も起らぬ(笑声起る)。是等を考えて文士が一言一句に影響の大なるものある事に注意して呉れると、其作物が悪影響、悪感化を社会に与えることは無かるうと思ふ。作者が心中物を書くのは悪意があつてでは無いとしても、其作物を出版する書肆などに至つては積極的に挑発的の文字を羅列して顧みないことがある。その一つの例を挙げますと、元禄十六年(一七)、もう元禄の最後の年でありますが、其年に出た『心中鹿子』と云う書物があります。当時心中の本場で

あるところの京、大阪、堺の情死を二十八ばかり挙げてあります。其中には近松が『曾根崎心中』の材料としたところのお初・徳兵衛の情死なども入って居りますが、其巻尾に「此外珍しき、心中出来次第後より書加へ追々出し申候」といい、「諸所方々に名の無き心中は数多有之候得共茲に略す」云々として、そう云う様な文句を列べてある。其翌年、宝永元年（一七〇四）に版になった所の『絵入好色心中大鏡』と云う本がありますが、是も京、大阪を主として書いてある。其初に序文の体裁で「きのふも心中、今日もまた飛鳥川の淵瀬変つたことが流行りける」云々と書き、そうして巻尾に「尚ほ新しき心中のゆき方聞付次第版行可致候、明日はとうから御評判」云々として、『心中後日の塚』と云うのを五巻出すと豫告をして居る。それは本屋の広告文でありましょうが、又堂々たる作者自身も頗る挑発的の文句を連ねて居る。大抵どの心中でも心中をして仕舞つた結局の所には甚だ穩かならざる文句を使つてある。近松の『曾根崎心中』の一番終いには「貴賤群集の廻向の種、未来成仏疑ひなき恋の手本となり、けり」とある。是れ挑発的の文字と云わずして何ぞやと評すべきものであらうと思う。それから同じ近松の『心中宵庚申』の末には「枝をならさぬ君が代に比類稀なる死姿、語りて感ずるばかりなり」といい、紀海音の『心中二つ腹帯』には「武道の燈掲げたる末世に名をこそ照しけり」と飛んだ所へ武士道を持つて来たり、斯う云う文句が到る処にある。是に於て情死を真似る者が続々と出て来るのである。其真似る者はどう云う調子で出て来るかと云うに、近松が『曾根崎心中』を出すと非常な評到である。文章が名文であるのみならず、それを淨瑠璃にして大入りを得たと云うのでありますから、其翌年に他の或る遊女が『曾根崎心中』のお初のを慕つて、常に墓参りなどをして居つた、そうし

て自分の為に勘当せられた所の情夫を救わんが為に自分が一人心中をしたと云うことがある。これが『曾根崎後日心中』として作られて居るが、是は全く曾根崎心中の感化と見なければなるまい。又宝永年中（一七〇四～一七一四）に紀海音の作った『梅田心中』と云う浄瑠璃があります、其中に情死をしようと云う女性のお高と云うのは、近松の作った『今宮の心中』の中に、次郎兵衛と云うものとおきさと云うのが一本の松の木で死んだのを大変に羨んだ趣が書いてある。それから又近松の書いた『緋縮緬卯月紅葉』と云う心中物の中には斯う云うことが書いてある。お亀と云う婦人が、昨日は私が気晴しとして父と共に半九郎の心中狂言を見に行つた、けれども餘の事は耳へも入らず、ただ半九郎とお染と心中をする最期の台詞が此方の胸に皆こたえた、「二人死ぬなら死にたいが、こな様死んで下さりよか」と云う様に、近松は他人に真似をせよと云わぬばかりに書いて居る。かかる筆鋒であちらこちらから勧めるものでありますから、死んで浮名を立てられることを愚かにも一の名譽の如くに心得る仲間も出て来る。恐らくはそれは極々の無智の仲間でしょう。今日と雖も芳を千歳に垂れずんば醜を百載に流さんと云う様な古風な考を有つて居る不心得者が無いとも限らぬ。近松も亦それをやつて居る。『生玉心中』の中には「我が噂も明日よりは歌祭文を身の上に」と云う句がある。それから近松の『堀河波鼓』と云う作の中には、或る愚鈍なる武士が婦人を誘惑するところに「よし御承引なきからは、こなたと爰で刺違え、上方に流行る心中と国ぢうに沙汰をさせ」云々と云う手巖しいことで、死んでから後どうなるものと覚悟をきめて、所謂無理心中を企てて居るものもある。かかる勢で大変に心中が多くなつた。近松の有名なる『心中天の網島』の中には、「やうく此さとの心中沙汰が鎮まつたに」云々といつて居る。

『心中大鑑』などの中にも「また心中があつた騒ぐまい」と云う様な文句がある。『曾根崎心中』にも「今茲の心中、善悪の、言の葉種や、繁るらん」と云う様なことを言つて居る。そうして彼の殉死、即ち追腹の流行つた頃には、尋常一様の死に方では面白くないとて種々珍しい死に方を考える人のあつたと同じように、心中の方でも、ただ剃刀で咽喉を切るとか、身を投げるとか云うことでは面白くないと云うので、お夏・清十郎は薬を飲んで死んで居る。或は同じ水に入るにしても、近江八景の唐崎の松の所へ行って飛込むと云う様に、死場所を択んだものもある。かくの如く心中が流行つて来たのでありまして、その数の統計を取ることは出来ませぬが、とにかく多いということは確であるかと思ふ。

上に述べたのは文学を以て世の中の人を楽しませると同時に之に伴える弊害の側を論じたのであります。之が音楽に伴うときには其利害共に尚一層著しいのであります。書物が版(出)になつたばかりでは、之を読む人だけが知るのみですが、それを芝居に演じ、浄瑠璃に語るとなれば、弊害のあるものは一層の弊害となるのであります。彼の豊後節(浄瑠璃の流派の一つ)と云うものが一時禁止せられたのは、全くこれがためであつた。殊に新内節の如きは悲哀な調子で悲哀な出来事を語りますから、それを聴く時は、今日の言葉で云えば、魔の手に引込まれるような心持になつて仕舞う。されば甚だ卑猥なことです。吉原の遊廓などでは、廓内に新内節の流して来るのを止めて居たとか云う話であります。昔或る時代に止めて居つたのは確らしい。それは金を使い込んだとか、どうしても添われないとか、湿つた話をして居る時に、新内節でも聴けば、直ぐにそれに引込まれて仕舞い、最期の決心をするからである(笑声起る)。文学の側の話は先ず是位にして、あとは省いて置きましょう。精しく申した

所が、今言つた様な具体的の例を数多く列べるに過ぎないのであります。

是の如く世の中に心中が流行り、そうして其流行の大原因は亦斯う云う文学上の作物にもあるといふことを幕府も認めました。そこで八代將軍吉宗公が出られて、幕府の財政を整理し、武家の氣象を振作し、世の中の風俗を改善せられたのであります。勿論此文学の方面も黙つて打捨てて置かれる筈はない。是に於て享保六年(二七)七月に、芝居、操芝居とする淨瑠璃は宜しいけれども、其他は取締りをする云々と云う令を出して居ますが、その翌七年(二七)十二月に至つて愈々嚴密なる法令が出て居ります。即ち自今(後この)書物を出版するに當つては、儒書、神書、仏書、医書、歌書の類は宜しいけれども、猥りなる儀を書き、異説等を取交えて作り出すことは堅く相成らぬ、それから是までに版にして出してあつた好色本の類は風俗の為に宜しからぬ儀であるから、追々に相改め絶版するようにせよ、と令して居ります。是月に又別の法令を以て、世上に於て筋の無き噂事、并に男女申合せ相果つる類を心中といい、之を版にして読売して居る、是は以前から停止せられて居るが、此頃猥りになつた様であるから、自今嚴密に取締り、そう云うものがあつたら、召捕つて急度罰に処する、若し又そう云うものを見のがして置いたならば、其町々の町役人、名主、月行司の面々まで、それぞれ落度に申付けると云うことになつて居ります。是は彼の江戸町奉行として有名なる大岡越前守、中山出雲守などが居つた時で、是等の人が將軍の旨を奉じて取締をしたことであろうと思ひます。尋いで同じ八代將軍の考に依つて幕府の法典御定書百ヶ條が出来ました時に、其中に特に心中に対する箇條を設けてある。即ち第五十條に、男女申合せ相果候者の事、と標出して、はじめに不義にて相對死いたし候わば……幕府

では心中と云う言葉は立派過ぎるというので之を用いず、相對死と云つてゐるのです。……相對死をして死んだ者は、死骸を取捨てさせ申いをさせない、葬式を出させないのです。それから相對死を企てたるいづれか一方が死に損つて居つたならば、下手人とする。即ち人を殺した者として死刑に行うという掟です。若しまた男女両方とも死損つたならば、三日の間晒しものにして……江戸ならば日本橋に晒して置いて……そうして非人手下にして仕舞うのであります。それから又主人と下女とが心中を企てて、主人の方が生き残つて居つたならばどうであるかと云うに、一般の例に依れば、矢張り下手人として死罪に処せらるべきでありますが、一方が召使であるからと云うので、主人を下手人にはしない。即ち死罪には行わないで、非人の手下として仕舞うのです。此一項は心中の本場なる大阪で、主人と下婢と心中をして、主人が死損つたと云う実例があつたので出来たのであります。上方はどうしても心中の本場です。さて此非人手下にすると云うことに就ては、井上金峨などは、心中を損じた者は日本橋に晒して非人手下にして仕舞うと云う掟であるけれども、さる節には其父兄なり親類なりが非人の親方に金を遣わして当人の身体を買つて来て、元に復えすと云うことである。こんなことは御上では御承知あるまいが、詰らない罰の方法だと言つて居る。そうして心中仕損い者に対しての今一層有効なる処罰として、盜賊などと同じ様に額に入墨をするのが宜かろうと主張して居ます。かかる寛かなることもありましたが、とにかく心中者処罰の法令が出来たのであります。固より其当局者たる奉行所の手心にも依ることですが、既に此箇條が出来た以上は、それに依つて処分するので、其れ以来の幕府の判決書類、評定所留書と云う類のものの残つて居るのを見ますれば、其中に



は之を仕組んだら面白からうと思われるような心中種もあるようです。其後例の明和（一七六四）、安永（一七八一）、天明（一七八九）に至って再び墮落の時代が来た。それに伴って心中物、其他卑猥なる小説類も沢山出て来ました。是に於て今度は松平定信が出て、寛政の改革をし、其後に復たまた墮落した時代には水野忠邦が出て、天保の改革をしましたのです。詰り波動の如く一起一伏で、以て今日まで来て居る。此頃の内務省の取締り方を見れば、幾分か有徳公（徳川吉宗）、楽翁公（松平定信）、水野越前守などの方針に似て居る様な感じが致します。忤心中者処罰の法令が出来て後も、かかる悪習の全く跡を絶つたと云ふことはいえない。併し乍ら其数は大に減じた。『賤の小田巻』と云う本がありますが、それは享和（一八〇一）の初め、即ち楽翁公の寛政の改革の直ぐ後に出来た書物で、当時の風俗を見るに便利なものですが、卑猥なる豊後節の浄瑠璃は禁ぜられ、従来心中と云うことも上方から江戸にまで流行って来て居ったけれども、此頃は聞かない云々と書いてある。一時はそう云うように心中が少くなつたと見えます。

江戸時代に於ての情死と云うものに就ては、まず是で大体の事を種々の方面から観察して述べたと思ひます。さて明治も四十二年（一九〇九）の今日に於て、情死でもしようとする人は、今まで言つたところの多くの原因の中で、宗教上の未来の信仰と云うことは昔の人ほど深くはあるまいと思ふ。まさか情死してあの世へ行つてからと云う様なことを深く信じて居るものは多くあるまい、この点は昔と今とは大いに違ふであろうと思ふ。併し自殺でもしようというのは多くは何等かの理由があつて多少の同情すべき境遇にあることは申すに及ばず、又自殺せんとする当座には多くは精神の変調を来して居

るのでしようから、平生にはそんな馬鹿なことをと思つて居つても、其場合になつたらば案外自分の都合の宜い方に解釈をして来世と云うことを信ずるようになるかも知れない。それは私は知らない。

そこで私は斯う思うのです。今まで述べ来た所の多くの情死の原因なるものは、昔の世も今の世も餘り相違はない。併しながら其分量に於ては大變に異つて居る。例えば今申した如く、来世の存在に對しての信念などは、昔よりも今が少くなつて居る。この来世の考が原因となると、ころの情死は、將來少くならなければならぬ。又死を軽んずると云う方面は如何というに、是は戦争などの場合、忠君愛国の為に命を捨てると云うのは格別であります。其他一般の場合に對しては、物質的なる西洋流の觀念が強くなつて来て居り、その他にも昔と今とは色々の点に違ひがありますから、死を軽んずると云う氣象がおいおいと減つて来ましよう。されば此点からも將來情死は少くならなければならぬ。窟となる。それから貞節問題、是などは、どうか何時までも昔風にありたいものですが、年若な寡婦が出来ますと……特に戦争など非常の事の為にさ様な不幸な若婦人が多く出来ますれば……後家を立てずとも宜かろうと云う様な論も唱えられるのでありますから、貞節問題も或る点に於ては或は昔ほど嚴重に言われぬかも知れない。貞節問題が幾分かでも昔ほどやかましく言われなくなれば、實際上ではありませぬ、理論上、此点から起るところの情死も將來少くならなければならぬことであると思ふ。然るに他の二つの原因、時勢の進歩、生活の困難と云うことに伴つて来る所の情死、及び輕文学の發達に伴つて来る所の情死は、不幸にして是から後も減ずると云う見込が私にはどうしても付かぬ。江戸時代に於て輕文学の發達、特に意を世道人心に注ぐことの少き文士の手になつた作物が原

困ことなつて、情死じょうしが多くなつて来たと言いうことを考えて見れば、是こゝから後も此点こゝは或あるは益々ますます殖ふえるであらう、頗すこぶる寒心さんしんすべきことであらうと思おもう。況いはんや生活問題せいこうもんだいの困難くわんなんは将来しょうらいますます増加ぞうかするでありましよう。されば政府せいふも個人こじんもよほど此点こゝに注意ちゅういしなければ情死じょうしは減へじますまいと思おもいます。情死じょうしといふことは些細せさいの事ことのようであり、情死じょうしの多少たうしやうはやがて国民こくみんの氣風きふうの剛健こうけんであるか、柔弱じやくじやくであるかを卜うすることが出来るのであります。現在げんざい及び将来しょうらいの事を論ろんずるのは私の今日けふのお話おはなしの趣意しゆいではない。唯ただ一般いぱんの自殺じくさつと云いうことに就ついて彼此かれこれと実例じつれいを調しらべて居いる中に、情死じょうしのことだけが先まづ一つ纏まとまりましたから、今日けふここで述べましたのであります。何いずれまた機会きかいがありましたらば、他の方面たのほうめんのことをも御話おはなししようと思おもいます。

(明治四十二年〔一九〇九〕十二月「史学雜誌」第二〇編第一二号)

- 「歴史より観たる自殺特に情死」(『明治文学全集 第七八巻』明治試論集(二)、筑摩書房、一九八九年二月)所収。
- 引用文を除いて、旧字・旧仮名遣いは、新字・新仮名遣いにあらためた。
- 読みやすさのために振り仮名を付加した。
- 理解を助けるために割註をつけた。
- 引用文を除いて、旧字・旧仮名遣いは、新字・新仮名遣いにあらためた。
- PDF化には`LATEX 2ε`でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。
- 科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」  
<http://www.cam.ac.uk/munehiro/scilib.html>
- 「科学図書館」に新しく収録した文献の案内 「科学図書館掲示板」  
<http://6325.teacup.com/munehiro/meda/bbs>